京都市「学まち連携大学」促進事業

卒業生インタビュー

特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば　事務局長
品田　真孝（文学部児童教育学科 2010 年度卒業生）

大学時代にボランティアをした NPO 法人で、いま職員として働いています

私は、「特定非営利活動法人 山科醍醐こどものひろば」（以下、「ひろば」）で職員として働いて 8 年になります。この NPO 法人は、山科・醍醐地域に住むすべての子どもたちが心豊かに育つために、地域の社会環境や文化環境がより良くなることをめざして活動していて、私は大学に入って間もない頃からここでボランティアをしていました。

「ひろば」のボランティアを始めたのは、同期の基礎ゼミのほぼ全員が行っていたことも理由の一つですが、とにかく楽しかったんです。月 1 回の単発ボランティアだったし、ベテランのボランティアの方にとても大事にしていただきました。当時はいまほどボランティアが一般的ではなかったので、私たち学生は将来の担い手として期待されていたのかもしれませんが、ベテランの方々のフォローのおかげで私たち学生は楽しくボランティアを続けることができました。

ボランティア活動に励む人たちの姿が、とても新鮮に映りました

中学・高校を通じて、部活動をしない、いわゆる帰宅部でした。そんな私がボランティアを始めたのは、大学入学後しばらくして、クラスの友人が学内の学生ボランティア団体「京都子ども守り隊～守るんジャー」（以下、「守るんジャー」）の新入生説明会に参加すると言いだして、それに同行したことがきっかけでした。

「守るんジャー」は交通安全ボランティアで、児童教育学科のオリターが入っていたので、私も友人につられて入りました。

私が入学したのは、児童教育学科が文学部に新しく設置された年で、学内に子ども系ボランティアもなかったので、先生方は小学校の学習支援ボランティアや「ひろば」でのボランティアなど、教育実践の場を開拓することに力を入れておられました。学生も、楽しいうえに仲間もいるので、誰に指示されるでもなく勝手に人形劇団を立ち上げるなどして、みんな競うようにボランティアに励んでいました。いろいろな場で経験を積んだり学んだりすることに対して、学生はすごく意欲的でしたね。児童教育学科の第 1 期生なんだという気概のようなものがありました。

私自身は、「子どもが好き！先生になりたい！」という熱い思いはなくて、児童教育学科に入ったのは「教員は食いはぐれがないから、なれたらいいな。ついでに寺社仏閣が好きだから京都の大学を受験しようかな」という程度の動機だったし、ボランティアを始めたのも、たまたま説明会に行きたいという友人に同行したのがきっかけでした。

ただ、それまで帰宅部で何もしてこなかったからこそ、親元を離れて独りになった時に「何かしたい」という思いが湧いてきて、それが原動力になった気がします。それに、何もしてこなかったからこそ、初めて出会った周りの人たちのボランティア活動に励む姿がすごく新鮮に映ったし、1 回生の後期に授業の一環で大学の近くの小学校の学習支援ボランティアに通って、子どもたちと毎日一緒に勉強をして、給食を食べて、遊んでいるうちに「先生って、おもしろい仕事だな」と思うこともありました。

ボランティア活動は、自らサークルを立ち上げるほどに私を変えました

大学生活の中でいちばん楽しかったのは、学内サークル「げん Kids★応援隊」（以下、「げん Kids」）の活動です。2 回生になったとき、まだ学内に子どもたちと遊ぶ企画もなかったので、「だったら自分たちでつくったらええやん」と思い立ち、クラスの友人に声をかけて、立ち上げました。1 回生の前期から後期にかけて、さまざまなボランティアを経験するうちに、高校を卒業するまで帰宅部だった私が「もっと自分たちのやりたいことができるのではないか」と思うほど変化したんです。

「げん Kids」では、学園祭で子どもたちと“ものづくり”を楽しむ「ちびっこランド」で企画したり、学内で地元の小学校の子どもたちと楽しむクリスマス会を開いたりしました。そうすると、それまで若者しかいなかった大学に、子どもたちの姿が見られるようになって、少しだけ学内の風景が変わったような気がしました。

企画内容や日程はすべて学生が決めて、先生方の介入は一切なかったのですが、先生に立ち会ってもらえるように日程を調整したり、先生から「子どもたちの安全確保は手を抜かないように」との助言を受けて、大学までの主要経路に案内係の学生を配置したりしました。

そうした活動で忙殺される日々でしたが、仲間たちと夜中まで作戦会議をして、「次はあれをやろう。これをしよう」と話し合った時間も、いま振り返れば楽しい思い出ですし、ふざけ合う仲間を見ているのも楽しかったし、とにかく何から何まで楽しかったですね。

先生方の温かい眼差しが、挑戦への後押しとなりました

大学生活のエネルギーの大半は「ひろば」と「げん Kids」の活動に注いでいました。そうさせたのは、子どもたちの笑顔です。子どもは、家庭と学校と第三の居場所とでは、見せる顔がまったく違っていて、「ひろば」や「げん Kids」など第三の居場所では私の言動や創作物が子どもたちの笑顔に直接つながっていると感じることができました。「楽しかった！また来たい！」と言われたり、「将来、大学生になって橘大学に来ます」という手紙をもらうと、すごくうれしかったし、「ああ、よい経験ができたなあ」と手ごたえを感じました。

そんな子どもたちの笑顔を見ることができたのは、先生方が私たち学生を信頼して、まかせてくださったことも大きかったと思います。何もかも自分たちの力でやっていると思っていたけれど、じつは先生方が尻拭いをしてくださっていたのではないか。大学生になって、一から自分たちで創ることに挑戦できたけれど、それを見守り、後押ししてくれる先生方や大学職員のみなさんがおられたことは、何かと制約の多い世の中にあって、本当に恵まれていたと思います。

地蔵盆や校庭キャンプなどの地域連携活動で、いろいろな人と出会いました

「げん Kids」は、夏になると、大学が立地する大宅地域の町内会から地蔵盆に呼んでいただくようになりました。それが地域との連携の本格的な始まりだったように思います。当時は地蔵盆なのに子どもが遊べるような企画が少なくて、「守るんジャー」の活動で知り合った地域住民の方が「大学に子どもと遊んでくれるサークルがあるなら、地蔵盆に来てもらおう」と提案してくださったようです。それで、「げん Kids」は模擬店やゲーム遊びを担当して、異年齢の子どもたちが楽しく遊べるよう、あれこれと工夫をしました。

これを皮切りに、その後は他の町内からも毎年のように呼ばれるようになりましたし、勧修小学校の児童の保護者で構成する「勧修おやじの会」や PTA のみなさんも校庭キャンプに呼んでくださるようになって、地域とのつながりが強まっていきました。

そのたびに企画を考えるので、一から何かをつくり上げていく大変さと楽しさを学びましたし、資金の確保や管理、チラシ配布などの広報、保護者への連絡、参加者の安全確保などについてもたくさん学びました。

こうした地域でのボランティア活動で、最も苦労したのは人間関係、最も楽しかったのも人間関係です。もともと私は自分だけで行動する傾向があったので、2 回生の夏の「ひろば」のキャンプの実行委員長をしたときは、周りに相談したり助けを求めることができず、一人で抱え込んでしまって、とうとう胃を壊してしまいました。そういう弱さを克服したいという思いが、2 回生以降の「げん Kids」などで活動する原動力の一つになっていたと思います。

その一方で、ボランティア活動を通して、いろいろな考え方やスキルを持った人と出会うのは本当に楽しくて、その方々から学ぶことも多く、ワクワクするような刺激をたくさん受けました。

NPO 法人で働くうちに、困難を抱えた子どもの存在に気づき、視野が広がりました

2 回生の終わり頃には教員よりも福祉系の活動に取り組みたいと思うようになり、4 回生になると就職先として「公益財団法人 京都市ユースサービス協会」（以下、協会）を考えるようになりました。

協会は、青少年（中学生～30 歳）の支援を目的にしていて、居場所づくりや個別支援など行う青少年活動センターを京都市内に 7 カ所も設置しています。大学がある山科区にも山科青少年活動センター（以下、「山青」）があって、私は 4 回生の約 2 カ月間、山青でアルバイトをしました。「ひろば」の活動でも「山青」にお世話になることがあって、親身に対応してもらっていたので、「ここで働いたら、おもしろいだろうな」と思ったのです。

幸運なことに、職員募集があり、採用されて、京都市内の 2 カ所の青少年活動センターで合計 3 年間働きましたが、もっと子どもの居場所づくりに本腰を入れて取り組みたくなって、「ひろば」の職員に転職しました。

「ひろば」は、子どもの健全育成事業、要援護児童支援事業、地域連携に取り組んでいます。具体的には、子育て相談、演劇鑑賞や文庫活動、異年齢集団の中での子どもたちの体験活動、子どもと家族が自由に集うことができる居場所づくりなどで、子どもの貧困が顕著になりかけた 2010 年頃からは地域ぐるみで子どもの貧困課題に取り組むことに力を入れています。

私自身は、学生時代は小学生と接することが多かったので、「ひろば」の職員として中高生とも関わるようになると、より視野が広がりました。学生時代に接した子どもたちの中にも、集団になじめないとか貧困状態にあるなど、困難を抱えた子どもがいたはずなのに、自分にはキラキラ

した子どもしか見えていなかった。たぶん自分が学んでこなかったから目にも映らなかったのだろうと気づいたのです。

地域で活動することは、住みやすさと豊かさにつながります

山科の地域で学び、働き、暮らすようになって 15 年。いまでは山科・醍醐地域のどこを歩いても知り合いに会い、公私ともに相談できる人も身近にできました。私も妻も京都出身ではなく、親や親戚も近くにいませんが、妻が出産したときは地域の現役のタクシー運転手の方が病院まで送ってくださいました。そういう頼みごとができる関係性を、周りの人たちと築くことができたのは本当にありがたいと思っています。

困ったときに、信頼できる人たちが身近にたくさんいるのは、とても心強いし、楽しい。学生時代から暮らし、活動している地域だからこそ、顔なじみがいて、それが住みやすさに直結し、私生活をも豊かにしてくれるのだなと実感する日々です。